

☒ 話すこと ☐ 書くこと☐ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☐ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用☐ 家庭学習での活用実践の
ポイント

英語で自分の考えを自信をもって伝えられるように指導するためのAIの効果的活用について

実証概要

<校数>4校(高等学校4校) <人数>708名(高等学校 708名)
<学年>高校:第1、2、3学年 <アプリ 等> ELSA for Schools (ELSA JAPAN 合同会社)

<AI機能について>

活用したアプリは、音読や英語でのやり取りを瞬時に解析し、発音や語彙・文法などを詳しく評価できる点が特徴である。多様な学習コンテンツを制限なく利用でき、双方向の対話練習にも対応している。授業では、音読練習やスピーチ準備、発音チェックなどに活用し、生徒が自らの課題を把握しながら効果的に練習を進めることが期待されるアプリである。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●ELSA for Schools を活用した、話す準備を支える授業づくり

教科書で扱われている題材について、自分の考えを根拠を基に表現し、他者とのディスカッションを通して考えを深めることを目標に学習を進めた。AIは、そのための準備段階において、語彙の整理、論点の整理、情報の収集・選択、根拠の整理を支援した。特に ELSA for Schools の即時的な発話フィードバック機能を活用することで、生徒は議論に先立って自らの表現を見直し、より伝わりやすい英語表現を整えることができた。その結果、言語活動の場面では、自分の考えを相手に伝えるように述べることができ、他者の意見を受けて考えを深めることができた。

●AI活用と対話的な学びを支える教師の役割:複数の視点を示し、考えの形成を促す指導

ELSA for Schools は、ディスカッションで用いる英語表現の音声確認に活用し、生徒が発音、イントネーション、流暢さを意識しながら、自分の発話をより伝わりやすいものへと整える上で有効であった。一方で、論点について自ら判断し、根拠を基に考えを形成するためには、教師が背景知識を整理した上で、複数の立場や見方を示し、生徒の思考を広げたり深めたりする指導が重要であった。このことから、ELSA for Schools は表現の準備を支える手段として機能し、教師は生徒の思考と判断を支える役割を果たすことが求められることが明らかとなった。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

英語力(話すこと)の変容 計4校のモデル校対象

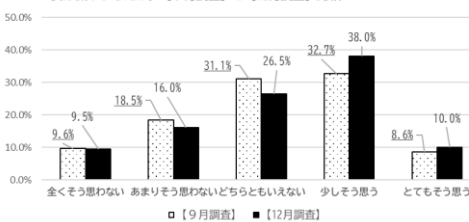
CEFRレベル	6月調査	12月調査	増加割合
B1レベル相当	605人	605人	5.1%
A2レベル相当	23.6%	28.8%	5.1%
A1レベル相当	38.8%	41.5%	2.6%
A1レベル相当	37.5%	29.8%	-7.8%

評価方法:英語能力に関する外部試験,教師の見取り

※1つのモデル校の第1学年は開始時期が遅くなったため、集計非対称とした。

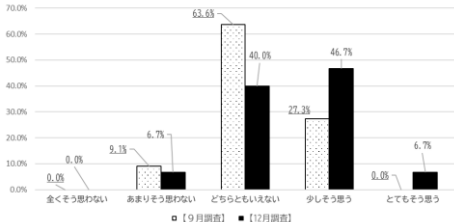
②児童生徒の関心・意欲の変化

「ELSA for Schools」を使って学習することで、英語を話すことへの不安は減りましたか。【9月調査】と【12月調査】比較



③教師の指導の変化

「ELSA for Schools」の導入によって、毎回の授業で生徒が英語で自分の考え等を発言したり、やり取りしたりする言語活動の時間の割合は高まりましたか。」



AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●英語教育におけるAI活用推進体制の構築と成果

本県では、英語教育スマート・ラーニング協議会を開催し、取組の方向性の検討、好事例の普及、課題の共有などを通して事業の円滑な実施を図った。また、協議会での学びを通じて、AI英語活用リーダーはAIの基本機能や活用方法、指導理論を身に付け、学校内で指導的役割を担うようになった。さらに、リーダー以外の教員に対しては、公開授業や指導事例集の共有、AIをテーマとした研修の実施に加え、各校が提出する英語授業の指導改善に係る報告書にAI活用を取り上げる機会を設けることで、自発的な取組を促した。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●AIで変わる英語学習:成果・課題・次の一歩

実証研究では、ELSA for Schoolsやその他AIアプリによる即時フィードバックが、生徒の発信力向上や個別最適な学びを後押しし、教師の指導改善にもつながった。特に ELSA for Schools では、発音や流暢さ、語彙、文法等に関する個別のフィードバックを通して、生徒が自らの表現を見直し、改善する姿が見られた。一方で、活用量の個人差、評価との整合、プロンプト設計や活用場面の精査、有償アプリの継続性といった課題も明らかとなった。来年度は、無料AIを活用した指導法の研究と今年度データに基づく効果検証を進める。